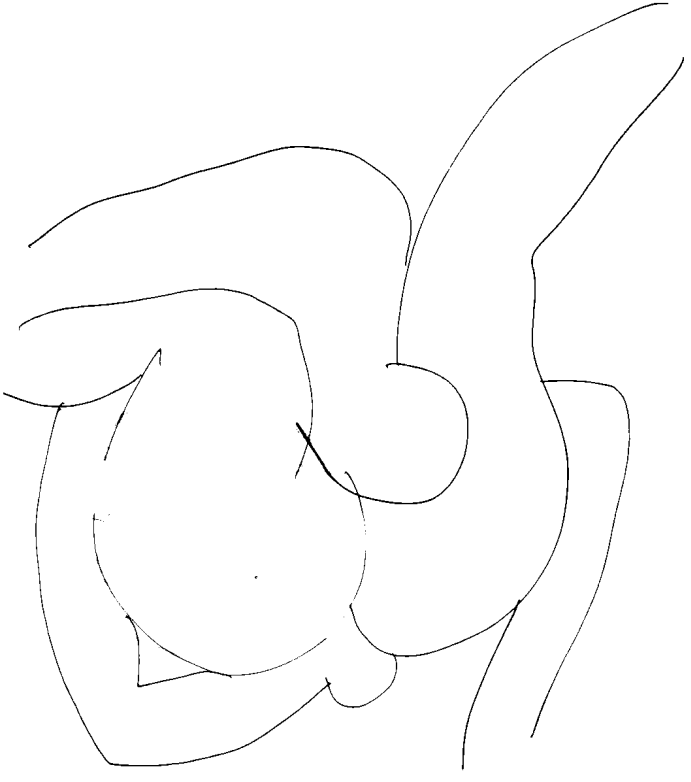
エーゲ海に捧ぐ

池田満寿夫

池田満寿夫第一小説集

エーゲ海に捧ぐ

角川書店



著者略歴

〈略歴〉 1934年，満州で生まれる。1952年，県立長野北高卒。版画家。1960年，第2回東京国際版画ビエンナーレ展文部大臣賞受賞。1965年，ニューヨーク近代美術館にて個展。1966年，ヴェニス国際ビエンナーレ展国際版画部門大賞受賞，ほか受賞多数。現在ニューヨーク・イーストハンプトンに在住。

〈著書〉「私自身のアメリカ」朝日新聞社刊，「思考する魚」番町書房刊，「美の王国の入口で」芸術生活社刊，「私の調書・私の技法」美術出版社刊。

エーゲ海に捧ぐ

昭和五十二年四月三十日 初版発行
昭和五十二年十二月五日 十七版発行

著者 池田満寿夫

発行者 角川春樹

発行所 株式会社 角川書店
東京都千代田区富士見二―一三―三
電話（〇三）二六五―七一一一（大代表）
郵便番号一〇二 振替東京三―一九五二〇八

印刷所 株式会社 東洋印刷

製本所 株式会社 宮田製本所

© Masuo Ikeda, Printed in Japan

0093-872181-0946(0)

目次

エーゲ海に捧ぐ　三
ミルク色のオレンジ　五七
テーブルの下の婚礼　二七
後記　二〇一
発表誌　二〇三

装幀・扉画　池田満寿夫

表紙絵——Like a Madonna, 1974

裏表紙絵——Day Sleep, 1974

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook

エーゲ海に捧ぐ

アニタの足の裏に一匹の蠅が留っている。

さっきから留っているのか、たった今留ったのか私にはもう憶い出せないのだ。しかし今見ている蠅はかすかに動いているような気がする。アニタの裸の足が動いていないのなら蠅の方が動いているに違いない。どこからか蠅がやって来て、そいつが彼女の足の裏に留り、少しでも動いているとすれば、アニタはそれを感じていてもいいはずなのに、彼女の足はじっとしたままなのだ。もしかしたらガラス製の蠅で撮影上の効果をねらってグロリアが素早くはりつけたのかもしれない。彼女ならそのくらいの芸当は朝飯前だろう。それなら一匹でなく二十匹ぐらいはりつけた方が効果的だと思うけど、アニタの方が厭がるに違いない。アニタは素裸のまま足の裏を私の方へむけて、あおむけに寝ている。だから彼女の脚の付根の蜜の巣が真正面に眺められる。照明のせいか、その部分が濃い青色に見え、腹部や胸の方がなんとなくぼんやりして

いる。アニタが私の方を見ているのかどうかもよく解らない。私の視覚はガラス製かもしれない一匹の蠅とアニタの蜜の巣だけしか感光していないようだ。カメラの回転する音も継続しているのか、しばらく前から止ってしまっているのか、よく解らないまま右の耳にあてがっている受話器から聞えてくる妻のトキコの声に私は平衡感覚を犯されている状態でいる。

アニタの足の裏に蠅を認めたのと、トキコの声が聞えてきたのと、どっちが先だったのだろう。トキコは酒を飲んでいる。なぜなら彼女は自分でそう言ったのだから。酒を飲むとトキコの声は普段より低くなるけど、一年半も会っていないので、声だけではどの程度飲んでいるのか判断出来ない。彼女が酔っているのなら、多分椅子の上にあぐらをかき、左手でひたいを支えながら受話器に向って喋っているだろう。トキコの低い声が続いている。彼女は太平洋の向う側にいて、私はこちら側にいる。彼女は夜のなかで喋り、私は昼のなかで彼女の夜の声を聞いているが、スタジオの内部は人工照明だけで採光され、外光は完全に遮断されたままである。アニタの下腹部と蜜の巣に密集したヘアーに照明が集中してきているように感じられる。彼女のあお向けになった裸体は、東京から電話が掛った時からそのままの位置で動こうともしていな

い。蠅も結局のところ、さっきと同じ位置に定着したままである。どうやらガラス製であるらしい。

アニタには日本語は解らない。しかし私の喋っている相手が妻のトキコだということは知っている。私の方から壁ぎわの影のなかに沈んでいるアニタの顔は見えないが、アニタの方からは受話器をあてがっている私の表情が見えるような気がする。アニタの蜜の部分を眺めていられるのなら、それもいいだろう。このスタジオにはアニタと私と、グロリアの三人しかいない。さっきまでグロリアは16ミリのカメラを廻していたはずである。しかし今はカメラの回転音が聞えてこないので撮影は中断されていると考えていいだろう。それにしても、どういうわけか私の位置からはグロリアの姿が見えないのだ。照明器具が三基アニタの周りをとりまき、三方からの光の放射がアニタの下腹部を直撃しはじめている理由が理解出来ない。電気を節約するためにも、撮影していないのなら光を弱めるか、消しておいてもいいはずだし、アニタにしても照明の熱をあびたまま、いつまでもじっとしている必要はないではないか。私のいとしい彼女の蜜がこの熱でとけはじめてはかなわない。アニタの内股の窪(くぼ)みに汗が吹き出してきている。彼女が眠っているのなら、いかに私からの眺めが素晴しくても、光を

弱めた方が生きものに対して思いやりがあるというものだろう。アニタは私の女だ。しかもとびきり上等の蜜の味を持っている。トキコにそれがわかるはずがない。

――そこにだれかいるんでしょう。わたしにはわかるわ。あなたは見栄坊だから、ほんとうは困っているのよ。そばに、だれかいるものだから、日本の女房から電話され、そのひとたちの前では、わたしにどなることも、あやまることもできない。日本語で喋っているのだから、そこがアメリカのサンフランシスコなら、そこにアメリカ人だけしかいないのなら、わかりゃしないのに。それとも日本語のわかる女の子でもそばにいるの？　いない？　そう、でもだれかいるのね。そう、あなたの友達ね。男の友達だなんて弁解しなくてもいいのよ。仕事しているのね。どんな仕事？　なんとなくわかるわ。大変なんでしょう？　あなたは今度だけは自分一人で仕事したい、だからわたしと一緒にはイタリアへ行けない、と言っていたしね。自分には孤独が必要だって、一年半前に言ったわね。顔を輝かせて、あなたにはめずらしく、きっぱりと、一人で仕事をしたい、一人で外国に住んで苦しみながら、疎外されながら仕事をすると言ったわね。だから、わたしはついていかなかったのよ。行くことだってできた。何度もその気になったわ。だけど、あなたは来るなと言った。それでもわたしは行こ

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook

うと思えば行くことができたのよ。でも行かなかった。どうしてだかわかる？

アニタの脚の位置が少し動いたように見えた。今まで私の方に見せていた足の裏が見えなくなっている。そうだとすればあのガラス製の蠅は彼女の足の裏で押しつぶされているだろう。もともとガラス製なのだから、逃げるわけにはいかなかっただろうけど、ガラス性の音ぐらい発しても良さそうなのに。いやプラスチック製で本当はもっとぐにゃぐにゃしていたのかもしれない。どうせグロリアがパークレイのスーパーマーケットで二十五セントで買って来た安物だろう。アニタの足の裏が向きを変えたおかげで、脚全体が浮きあがり、したがって彼女の蜜の巣の見える範囲がさっきよりも拡がっているのはいい。自分の女だって、外部からの条件が整わないかぎり、こんな風な眺めを簡単に提供してくれるわけではない。下腹部に集中していた照明にも変化が生じているのであろうか、漠然としか見えなかった腹部から胸にかけての線が、適度な陰影を保ち、彼女の裸全体が微妙な起伏を持った風景になっている。開かれた部分の細部が鮮明に見える。グロリアの姿は依然として見えない。その風景を照らしだしている照明の輪が裸の表面を移動しはじめている。グロリアが照明器具を操作していると考えられるが、私にはどうしてもグロリアが見えない。彼女は完全に影の空

間に隠れてしまっているのだ。カメラの回転音も、もう耳のなかには残っていない。トキコの声だけが太平洋を越えて聞えてくるだけである。

——どうしてだかわかる？　あなたに恥をかかせないためだったのよ。不意に行くことだってできたのよ。不意にわたしがローマのアパートのドアを開けた時の光景が、わたしには見えていたんだ。あわててズボンをひきあげて、立ちつくしているあなたのうしろに、あなたのオンナが震えて立っている。それがよく見えたのよ。そうしたら、いちばん恥をかくのが、肝心のあなたよりわたしの方だってことも知っている。それが日本の女の感情というものなんだ。あなたは見栄坊でおろかだから、あわてふためいたあげくに、わたしをなぐったかもしれない。

私はトキコの声に向ってイタリアでも一人だったし、サンフランシスコでも一人で暮していると言った。グロリアの影が不意に私の前を横ぎる。音のしないように歩いて、アニタの裸体があお向けに横たわっているベッドの端の椅子に腰をおろし、上半身をねじるようにして私の方を見はじめている。グロリアは黒の薄手のセーターを着、ジーンズのパンツをはいているが、ブラジャーをしていないことがセーターの上からでも解る。最近の若い女たちはブラジャーを故意に着けていない。乳首の突起がセー

ターの上から明瞭に見えていても、彼女たちは気楽にお喋りをし、意味もないことにげらげら笑う。人がいなければすぐ裸になって歩きたがり、人がいてもその機会さえあれば好んで裸になってみせる。しかし私はまだグロリアの素裸は見ていない。裸の女のそばに着衣した女が坐っている光景はきわめて贋ロココ的である。照明の輪が今度はアニタの乳房の間に集中している。アニタが眠っているのでなければ、息を殺して耳をそばだてているだろう。彼女は多分涙ぐんでいるかもしれない。ローマのカラカラ大浴場の遺蹟で月を眺めていた夜のように。照明効果はいつも女を世界の果へ連れて行く。月光とか噴水とか夜露とか猫のしのび歩きとか、宝石の朝の光とか、条件さえそろえば彼女たちは喜んで涙を浮べてくれるだろう。スポット・ライトを浴びているアニタの乳房が異様に白っぽく見える。汗が反射しているのかもしれない。私のひたいからも汗が流れ出ている。グロリアの方からなら、照明の反映でその汗は認められるに違いない。グロリアの青っぽい瞳が静止したまま私の方を見ているのが気になる。

――証拠がないとおもって、そういえるのね。だから、あなたはお馬鹿さんなのよ。あなたの方から見えないと思っていても、わたしの方からは見える、とトキコが言

っているのが聞える。今わたしには、あなたのそばにあなたのオンナがいるのが見える。トキコの声は前よりも声音が上っている。あぐらをくずして立てひざをしているのかもしれない。

――証拠はあるけど、今は言わない。通話料がどんどん高くなっていくのを心配しているようなあなたに、そう簡単には証拠をおしえてあげるわけにはいかない、とトキコが言っている。電話が掛ってから二十分以上は経過しているだろう。一通話税込みで三千四百円としても、すでに二万円以上にはなっているはずだ。

グロリアの青い瞳がまだ私を見つめている。アニタの乳房にもかなり強い照明のスポットがあたっている。そこだけが真昼の太陽に直射されている大理石の神殿のように見える。照明を何故消さないのか。私はグロリアに手で合図を送る。グロリアはその合図を了解しているらしいのに、立ちあがろうとしないで、じっと私の方を見ているだけである。グロリアは私の女ではない。それははっきりしていることだ。しかし彼女はここにいて、アニタの曝された裸体の開かれた蜜の巣を撮影している。三人の間でそれは何故かすでに了解ずみなのだ。

グロリアの髪は金髪で、アニタの髪は褐色がかっているが黒の方に近い。アニタに

はハンガリーの血が混っている。源をたどっていけば、モンゴリアンの血が混入していると彼女は信じている。グロリアのことは知らない。なにしろ二ヶ月程前、アニタが突然私のスタジオに連れて来たばかりなのだから。彼女たちが何年か前、ニューヨークで一年ほど一緒に生活していた事情は聞かされている。ご多分にもれず彼女たちは貧しかっただけなのだ。共同でアパートを借りた方が得にきまっている。若い頃は誰でもすることだ。そしてバークレイの大学の構内で二人がばったり会ったことも、ごくありふれた偶然であろう。驚いた変化といえば、グロリアがフィルムに熱中していたことぐらいだ。それから、彼女がひんぱんに私のスタジオに来るようになったのも、アニタと話をするためで、昔話に熱中し、棄てたり棄てられたりした男達の思い出を、早口の英語で喋り合う楽しみのためなのだ。グロリアの英語は私には理解しにくい。カルフォニアに来てから、私には彼等の喋っている英語がさっぱり理解出来ないのだ。アニタの英語だって完全に解っているわけではないのだから、まあやむを得ないだろう。それにしても私がグロリアの申し出を受け入れて、あやしげなフィルムを作製するために、自分の女をモデルに提供する許可を与えた理由が我ながらよくのみ込めない。私も共犯者の一人には違いないが、アニタまでがグロリアと一緒になっ

て、このいかがわしい計画に異常な熱意を示した本意が理解し難い。それにグロリアが腰掛けたまま、私の合図を無視している意図も解らない。トキコの声だけが、いやになまなましく響いている。トキコは私とアニタとの関係を推察したらしい。いや彼女は証拠を握っているとさえ言っている。彼女がそう言うのなら、まんざらおどかしだけではないだろう。しかし本当はどの程度まで嗅ぎつけたのか。アニタにはかつて一度も会っていないはずだ。それは明瞭な事実だ。トキコは持前のカンの良さで、私にオンナがいるらしいと想像し、想像が確信になり、確信がありもしない証拠を捏造させたのだ。あの時、トキコがローマに不意にやって来たら、確かにアニタとの蜜月旅行を発見しただろう。あの時トキコが迷路のような露地を探し廻ったあげく、やっと古びた石造りのスタジオの鉄のきしむドアを開けたら、トキコの言うように私は狼狽し、逆上し、それからどうなったか解りゃしない。彫刻家とモデルという古風な組合せなど、とうてい彼女には通用しなかっただろう。抽象彫刻に何故裸のモデルが必要なの、と言うにきまっている。あの拾って来た猫のグレコも無事に屋根づたいに逃げ出せたかどうか解らない。トキコときたら女の次に猫が嫌いなのだ。猫の毛がのどに入ったことを想像しただけで喘息の症状になるのだから。トキコはローマには来な

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook